月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.137



運命の戦い、ついに決着！　しかし――

英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～

今号も……ヴァンダライズ!!

も～っと集まれ！ファルコム学園

アルティナが意外な衣装を披露！

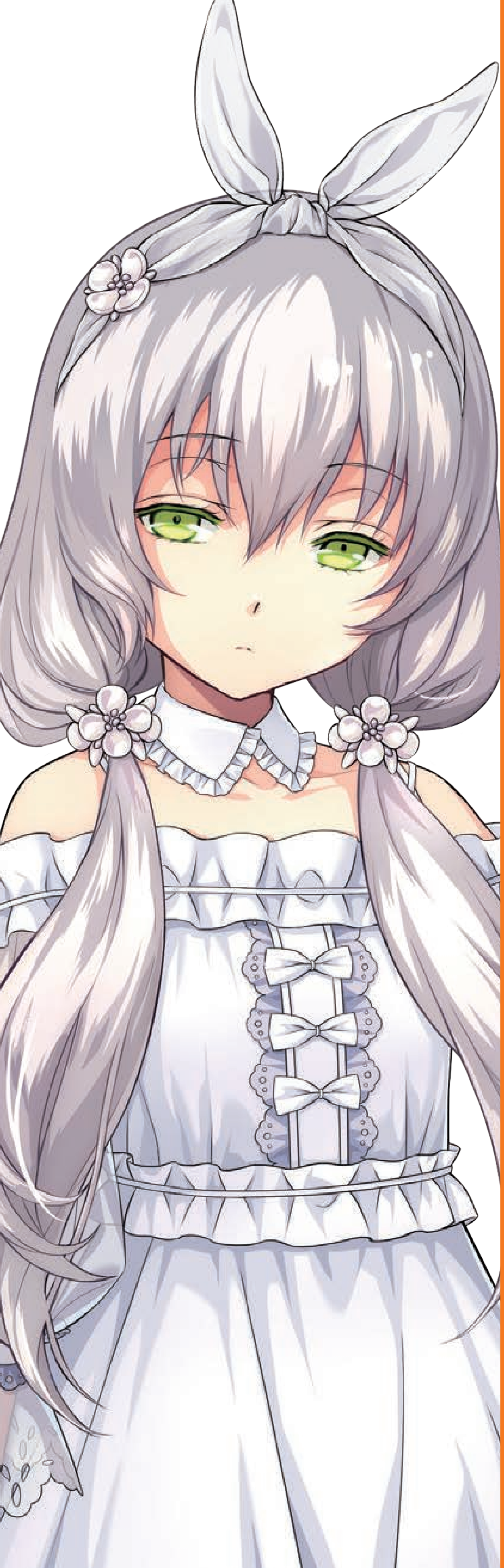
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を

スウィン&ナーディアが登場！

『英雄伝説 黎の軌跡II －CRIMSON SiN－』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



スウィン・アーベル

Swin Abel　（CV：梶原岳人）

年齢：17歳
武器：特殊双剣

数年前に暗殺組織《庭園（ガーデン）》から脱走した、元暗殺者の少年。戦闘では、二振りの剣を合体させて威力を高めたり、斬り込んで"マーキング"した部位を爆破するなど、特殊な機構が組み込まれた双剣を自在に使いこなす。一見ドライで合理主義的に見える振る舞いをするが、決して冷徹な人間ではなく、実際には真っすぐな性格をした常識人。《庭園》を抜けた後はしばらくの間、ナーディアと共に追手から逃れつつ、絶対に人の命は奪わない事を誓い、運び屋などで路銀を稼いで生活していた。その後、クロスベル自治州～エレボニア帝国の旅を通して縁の出来た仲間と共に新たな地で新しい人生を歩んでいたようなのだが…。

「過去を受け入れて前を向き始めた人間の決意──それを踏みにじるヤツを、オレたちは決して許さない！」



スウィン&ナーディアコンビが登場！
さらに、新エリアやストーリーの進行システムが明らかに！

THE LEGEND OF HEROES 黎の軌跡Ⅱ CRIMSON SiN
クロノキセキⅡ －クリムゾン・シン－

タイトル：英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-
発売日：2022年9月29日予定
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation5 / PlayStation4
プレイ人数：1人
販売価格：【通常版】7,800円（税抜）
【Limited Edition】10,000円（税抜）
【Limited Edition】※シナリオブック付き 12,800円（税抜）
【DL通常版】7,500円（税抜）
【デジタルデラックス版】10,000円（税抜）
【シーズンパス】3,500円（税抜）
CEROレーティング：審査予定

カルバード共和国を舞台とした『軌跡』シリーズ『黎の軌跡』の第2作『黎の軌跡Ⅱ』。今回は、『創の軌跡』の主人公・スウィンとナーディアの新イラストが到着！　また、首都・イーディスの未探索地域や、新たな街など、新エリアに関する情報。そして、ストーリーの進行形式に関する情報が到着した！

ナーディア・レイン

Nadia Rayne　（CV:石見舞菜香）

年齢：15歳
武器：針／仕込みぬいぐるみ



スウィンのパートナーとして共に《庭園（ガーデン）》から抜け出した、元暗殺者の少女。武器としては特殊針に加え、様々な仕込みが施されたクマのぬいぐるみを使用する。常人離れした感覚と卓越した計算・予測能力を持ち、感覚を研ぎ澄ますことで戦況や敵の弱点を"解析"出来るのだが燃費の悪さからか戦闘後すぐに寝たり、だらけてサボることも。自由気ままな立ち振る舞いやスウィンに甘える姿が目立つが、実際にはスウィンよりも遥かに疑り深いリアリストで、冷徹な感覚と思考の持ち主。そんな一面を自覚した上で、本質的には"真っ当な"スウィンに代わり、裏で冷徹な駆け引きや、他者を疑う役目を引き受ける事で彼を支えている。スウィンと同じく、クロスベル《再事変》以降は新たな仲間と共に第二の人生を送っていた。

「なーちゃんは毎日お昼寝で予定表を埋め尽くすような、のんびり自堕落ライフを所望します！」







キーワード
庭園（ガーデン）



正式名称は《四の庭園（フォーガーデン）》。大陸中部から西部にかけて、一時猛威を振るった暗殺組織。剣（ソード）・棘（ソーン）・金（アウルム）・錆（ラスト）という４つの"園"で構成され、それぞれの"園"は"管理人"と呼ばれる幹部によって統括されていた。《庭園》は各地で身寄りのない子供を集め、暗殺者としての英才教育を施すという残酷かつ合理的な育成システムを有しており、その成果によって、信じがたいほどの暗殺達成率を誇った。――しかし、《庭園》からの脱走を図った構成員２名により剣（ソード）の管理人が殺害されるという事件が発生。その後、共和国のマフィア組織《アルマータ》に協力していた残りの管理人も消えたことから、現在は壊滅状態になっていると推測されている。

『黎Ⅱ』さらに探索エリアが拡大！ カルバード共和国のリアルがより明らかに！

『黎の軌跡Ⅱ』では、前作で訪れることがなかった都市をはじめ、探索エリアがより拡がっている。首都・イーディス内においても、新たなエリアが登場するので、よりカルバード共和国の実態を知ることができるようになるはずだ。

首都イーディス　トリオンモール



首都３区・トリオンタワーの正面に広がる巨大モール。ヴェルヌ社製の最新導力製品が並ぶ「ヴェルヌストア」、高級スイーツを堪能できる「クインシーパーラー」や多数の作品を上映してる「導力シネコン」のほか、リベール王国の商品が販売されている「リベールアンテナショップ」等も存在している。

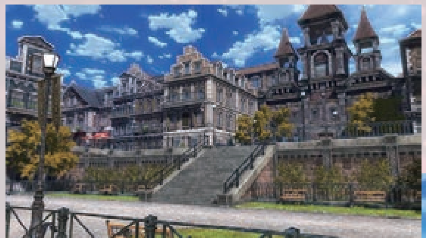
首都イーディス　セントトルマルシェ





イーディスでもっとも賑わう大規模市場。日用雑貨から生鮮食品まで一通り揃うため、首都の台所として親しまれているほか観光目的に訪れる者も多く、常に活気に溢れている。大通りから一歩離れたエリアにはこだわりの珈琲豆を扱っている焙煎所があり、モンマルトのコーヒーはここの豆が使われているらしい。

港湾都市メッセルダム





カルバード北部、北海に面した中規模港湾都市。北海貿易の要衝であり、古くは王都オラシオンに新鮮な魚介を届ける重要な漁業地だったが、飛行船技術の発達により勢いは縮小――それでも尚、レミフェリアなどへの重要な玄関口となっている。南部のラングポートとは異なり東方人街はなく、王国時代の街並みを残した港湾エリアは歴史地区としても人気。地理的に東方文化や中東文化への馴染みは薄いが、反伝統の前衛芸術（アバンギャルド）も昔から盛んで1208年にサルバッドで「導力映画祭」が開催されるまでは毎年、メッセルダムが開催地となっていた。

煌都ラングポート　東方弐番街



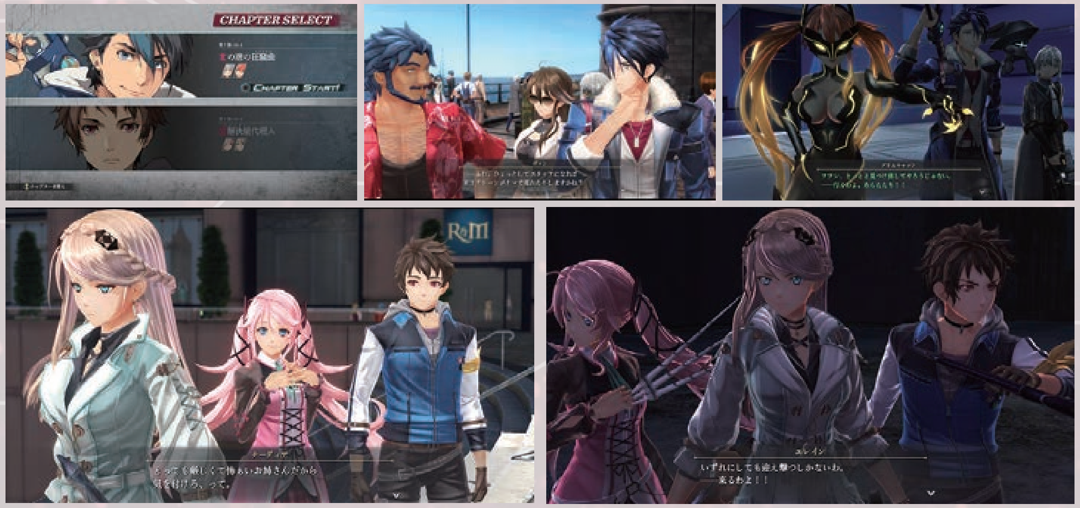


東方人街では"旧市街"にあたる地区。東方人街の顔であり、ルウ家のお膝元でもある壱番街とは異なり大衆食堂、銭湯など地元民の生活に密着した店・施設が多く並んでいるため観光客はあまり訪れることがない。東方三大拳法の一つ、"月華流"の総本山となる道場がある地区としても知られている。



『黎の軌跡II』のストーリーは チャプター選択方式で進行!

『黎II』は、主人公の裏解決屋・ヴァンとその協力者たちが、カルバード共和国の各地に分かれ、別々に行動することが判明。それを受け、ストーリーの各部ではチャプター選択方式が採用されていることがわかった。チャプター毎に主要メンバーが異なっており、そこで個別のストーリーが展開。そして、選択したチャプターが終了すると、自動的に未選択だったもう一方のチャプターが開始される形でストーリーが展開していくとのことだ。



一部チャプターでは特殊ミッションも発生!

一部のチャプターでは、ホロウコア AI《メア》を操作する導力ネットワークのハッキングや、スウィンの能力を活かしたターゲット尾行など、チャプター内に登場するキャラクターの特性に応じて、ストーリー中に特殊なミッションが発生することがあるようだ。



★今月もスーパーヴァンダライズアクション、いくぜ!★



魔王の依頼



魔王の証言



アドル発見



嘘と真実

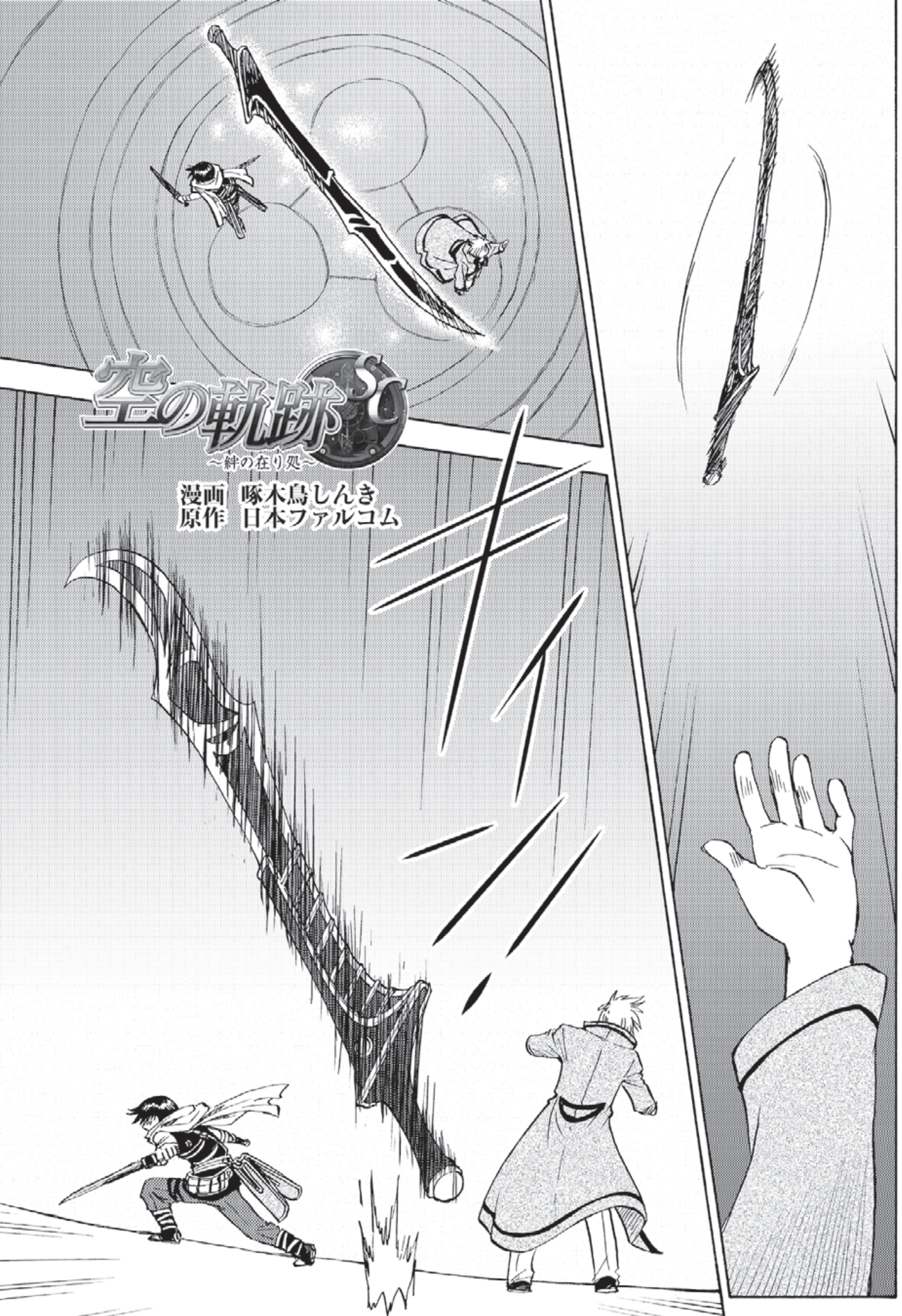


謙虚な美少女

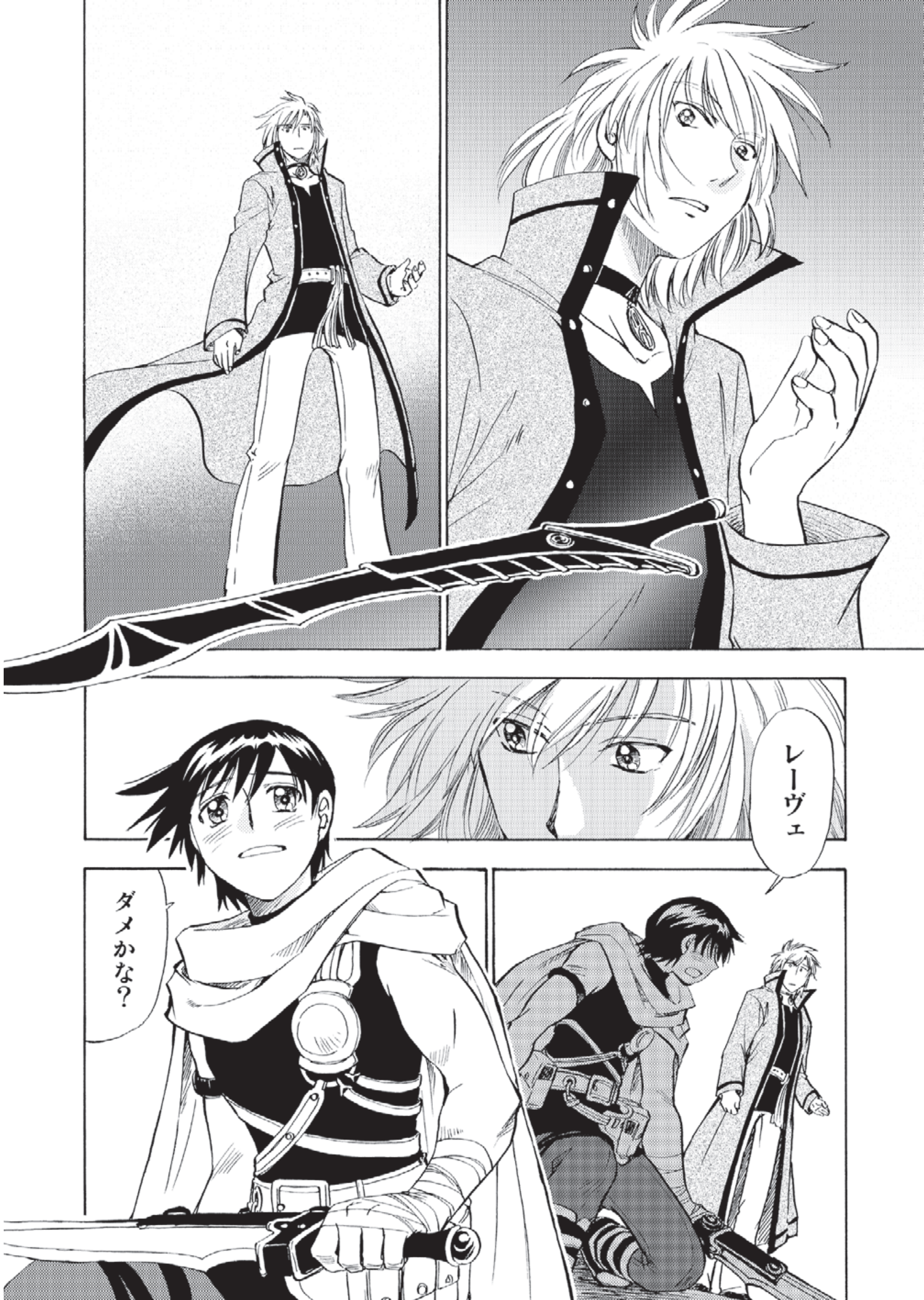


アドルと美少女




空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム


穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースIX」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も～っと集まれ!
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y
発行：フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

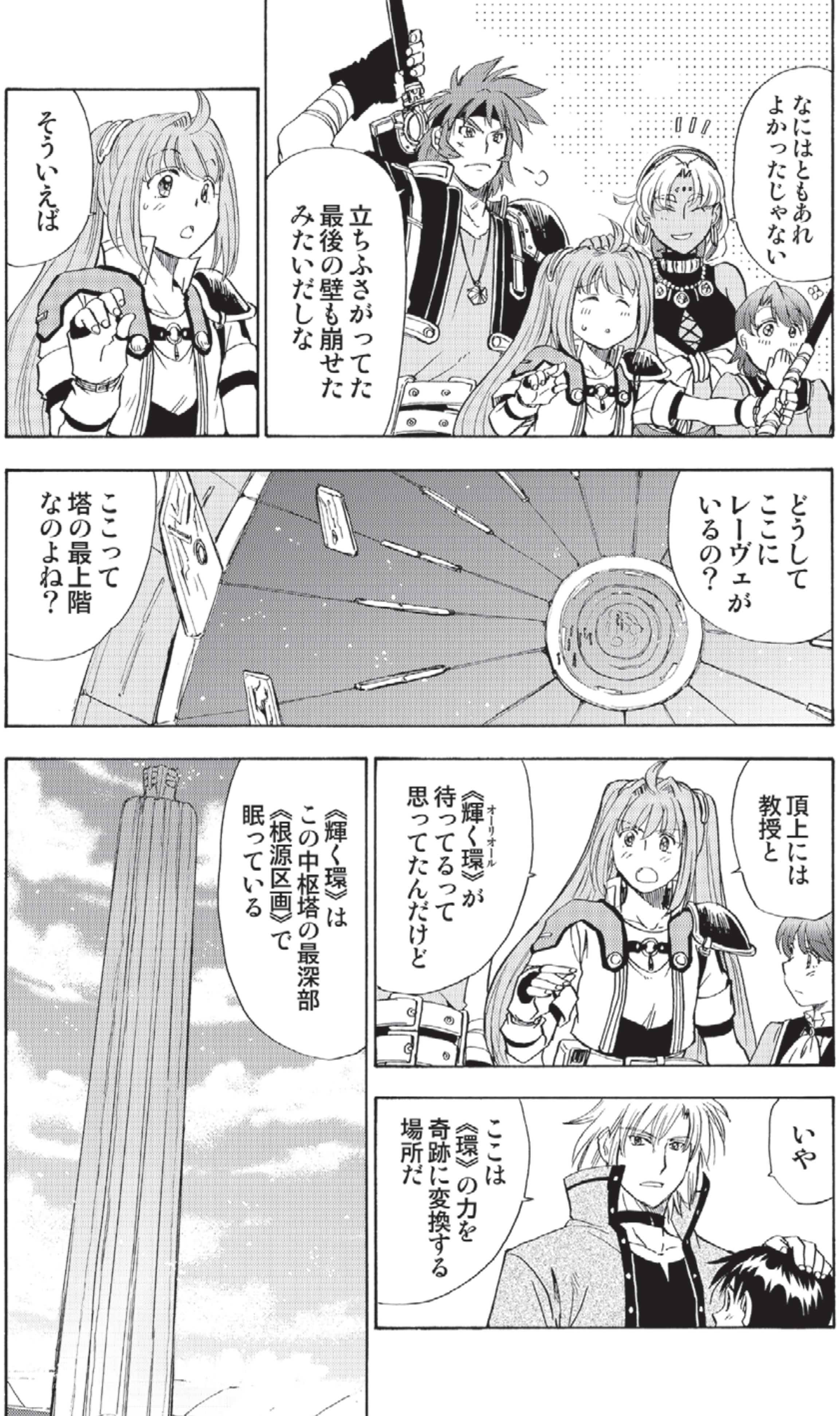

レーヴェ
ダメかな?


《剣帝》が
剣を落とされてしまっては


素直に負けを
認めるしかなさそうだ
やったあ!
ヨシュアが勝った!
レーヴェ
本当に…?
たった今おまえが証明してみせたのだろう?


人という存在を試す
その答えのひとつをおまえが出した以上
俺はもう教授に与する義理はない
すごい!
すごいよ!
ヨシュ…
あ
ぎゅう!


お…おい
よかった!
レーヴェが…戻ってきてくれた!
あの―

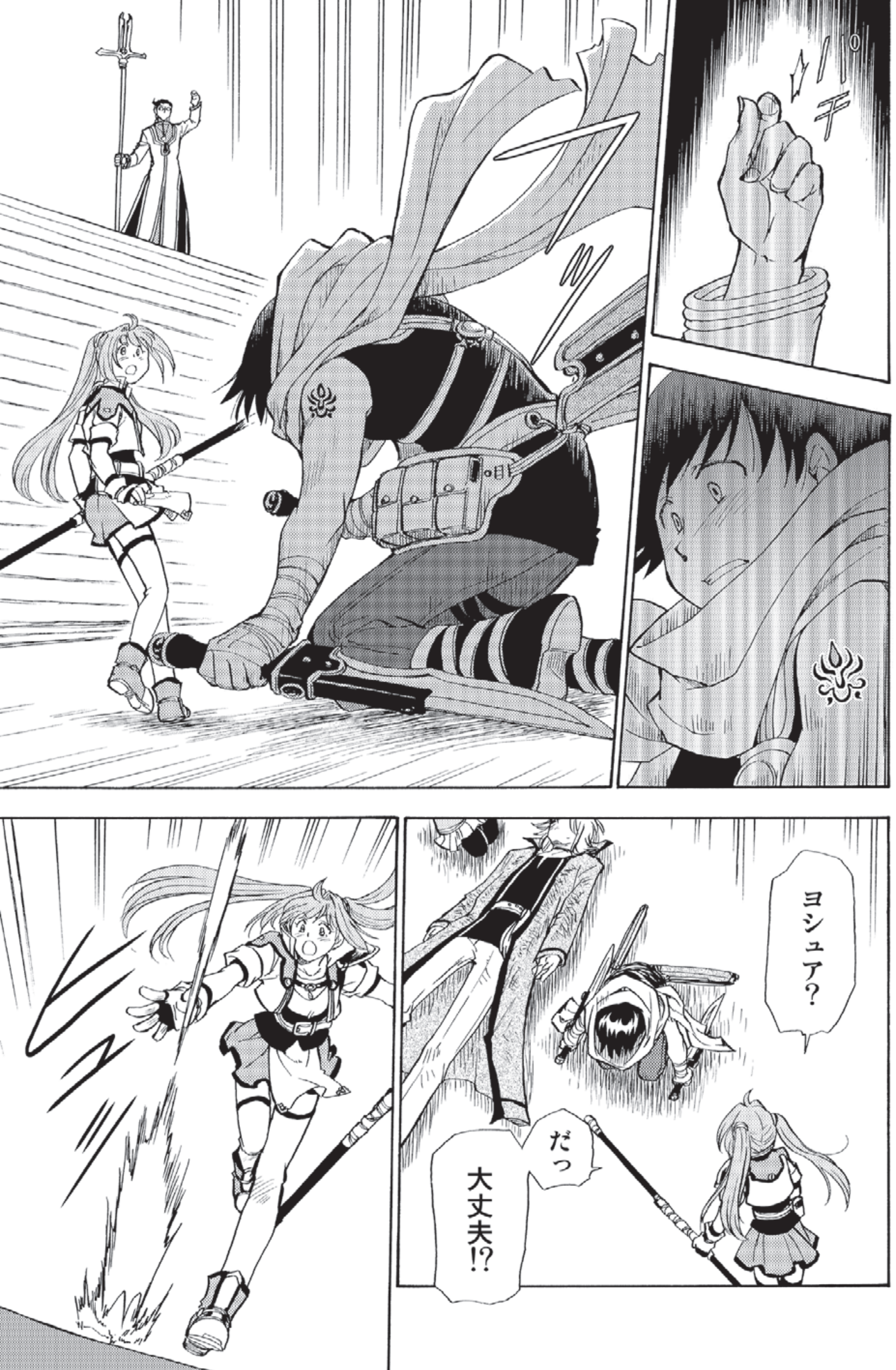

なにはともあれよかったじゃない
立ちふさがってた最後の壁も崩せたみたいだしな
そういえば
どうしてここにレーヴェがいるの?
ここって塔の最上階なのよね?
頂上には教授と《輝く環》が待ってるって思ってたんだけど
オーリオール
いや
ここは《環》の力を奇跡に変換する場所だ
《輝く環》はこの中枢塔の最深部《根源区画》で眠っている


根源区画
この先のエレベーターを使って行けと言ってたな
だが《輝く環》はそう簡単にどうにかできる代物ではないぞ
いくらおまえたちでも相当な苦労を強いられるはずだ
…だ
大丈夫だよ！
レーヴェがいるから！
こいつめ…
俺がついてくるのを当然のように…

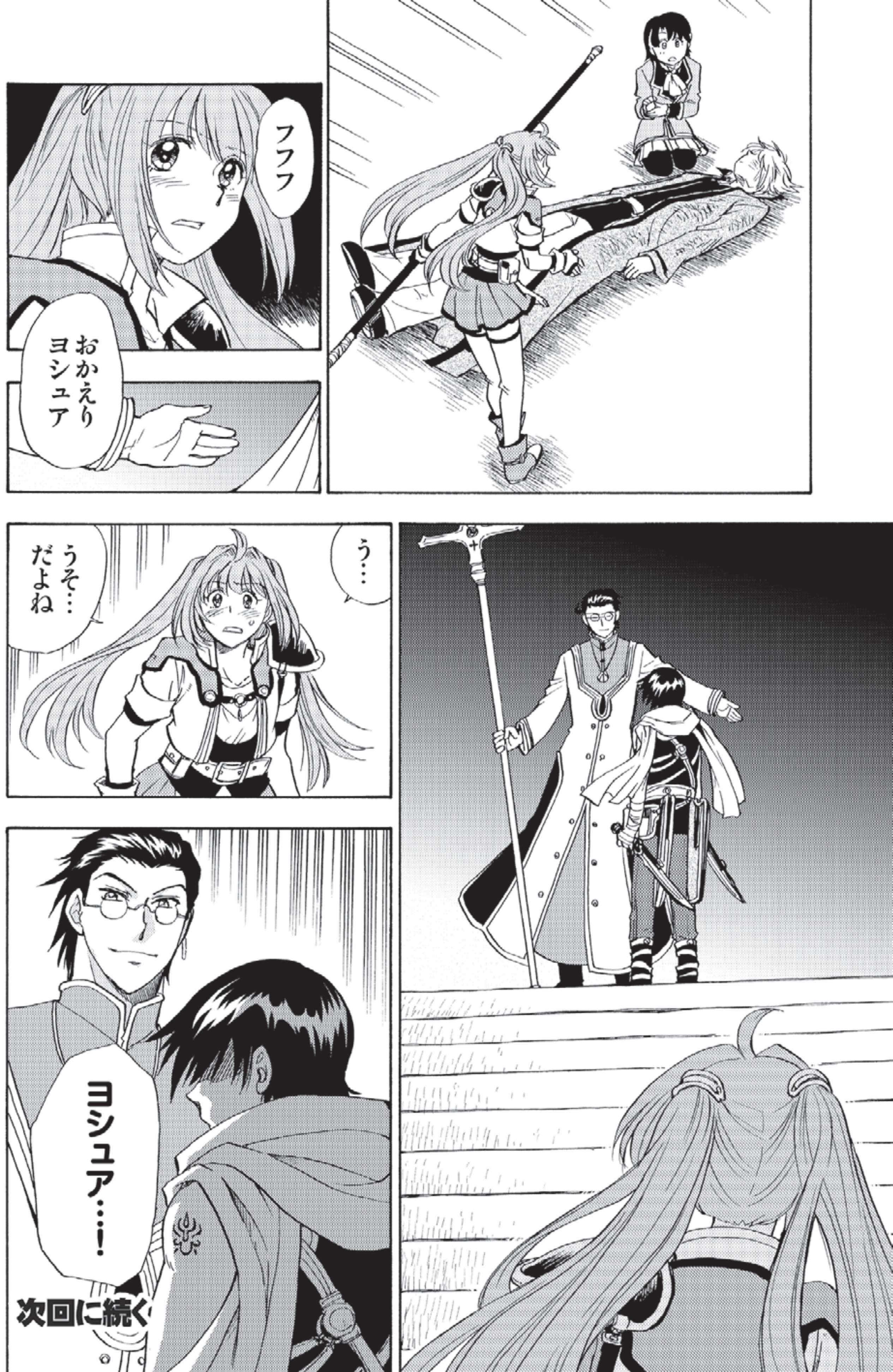

レーヴェ!?


フフ
ご機嫌よう
諸君
見事
試練を乗り越えて
ここまで
たどり着いた
だが
こういう
ルール違反は
感心しないな
《白面》
ワイスマン
教授！
なにが
ルール違反よ！
ヨシュアは
正々堂々と
戦って
やっと
レーヴェを
取り戻した
んだから！
それが
計画の主旨に
反すると
言うのだよ
結社に属する者は
皆《盟主》から
特別な力を
授かっている
そのような存在が
君たちに協力してしまったら
正確な実験が
できないだろう？


実験って…
まさか僕たちがここに来たことも計画の一部だったというのか…?
…幾分私の趣味も入っているがね
その意味ではヨシュア
君もまた実験の精度を狂わす要素だ
大変申し訳ないが
私の人形に戻ってもらうよ


パチ
ヨシュア?
だっ
大丈夫!?


リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて!
リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル=アークへと飛翔する!
英雄伝説 空の軌跡SC
~絆の在り処~⑥
啄木鳥しんき
定価:1000円(本体909円+税) ISBN 978-4-8021-3294-7
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y


フフフ
おかえり ヨシュア
う…
うそ… だよね
ヨシュア…!
次回に続く

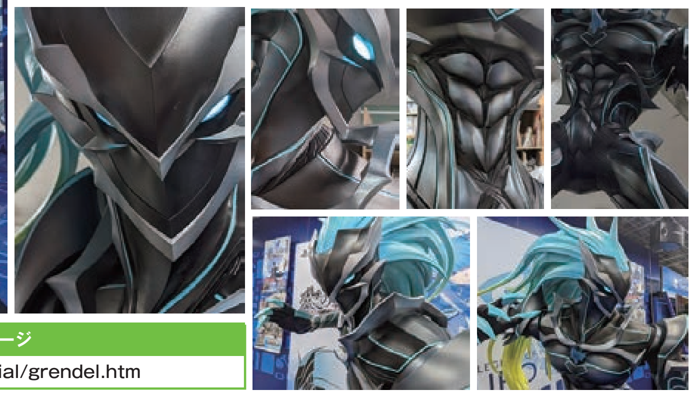
▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！



『黎の軌跡Ⅱ』《グレンデル(魔装鬼)》の等身大立像の制作・展示が決定！

9月29日に発売される『軌跡』シリーズ最新作『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-』で主人公・ヴァンが変身した姿《グレンデル（魔装鬼）》の等身大サイズ立像（2メートル超）がヨドバシカメラ マルチメディア Akiba・6階にて絶賛展示中だ。その姿は等身大だけにまさにド迫力。立像は今後、その他店舗、イベント会場等でも展示予定なので、特設ページをチェックしてみよう。



「グレンデル 等身大立像」特設ページ

https://www.falcom.co.jp/kuro2/special/grendel.htm

35周年を迎えた『イース』のオンラインくじが好評開催中！歴代アドルのオリジナルグッズをゲットしよう

『イース』シリーズの35周年を記念して、オンラインくじサービス「くじ引き堂」にて『イース オンラインくじ』が期間限定で販売中だ。くじはS賞からD賞まで用意されていて、必ずどれかひとつが当たる仕様。さらにハート型の缶バッジが必ずゲットできるお得な10連セットも用意。販売期間は7月26日となっているので、この機会に改めてアドルの足跡を振り返ってみよう。



Twitterフォロー＆リツイートキャンペーンも開催中！

開催期間中に「くじ引き堂」の公式Twitterアカウントをフォローし、対象ツイートをリツイートすると抽選で2名に「D賞 75mm缶バッジセット」が当たるキャンペーンも開催中。こちらも要チェック！



「DMMスクラッチ」でも『黎の軌跡』&『イース』のオンラインくじが開催！

『黎の軌跡』の限定グッズが当たるオンラインくじが「DMMスクラッチ」にて7月1日からスタート！　すでに販売中の『イース』スクラッチをあわせて、豪華景品をチェックしてみよう。スクラッチは、A賞からE賞までの景品のうちどれかひとつが必ず当たるほか、スクラッチ1枚ごとに当選のチャンスがあるWチャンス賞もあるので、お見逃しなく！

英雄伝説 黎の軌跡



A賞



C賞



D賞



景品
- **A賞**：額縁入りプレミアム複製原画（全1種）
- **B賞**：アクリルフィギュアプレート（全7種）
- **C賞**：キャラパス（全5種）
- **D賞**：アクリルぷちスタンド（全12種）
- **E賞**：缶バッジ（全12種）

販売期間

2022年7月1日（金）12:00～7月24日（日）

スクラッチ販売ページ

https://scratch.dmm.com/kuji/kuronokiseki/



Wチャンス賞

第１弾：E賞缶バッジ コンプリートセット（3名）（7/1(金)12:00～7/9(土)11:59）
第２弾：D賞アクリルぷちスタンド コンプリートセット（3名）（7/9(土)12:00～7/17(日)11:59）
第３弾：アクリルアートボード（10名）（7/17(日)12:00～7/24(日)10:59）
※抽選期間中でも規定数に達し次第終了します

イース





景品
- **A賞**：額縁入りプレミアム複製原画（全1種）
- **B賞**：アクリルフィギュアプレート（全7種）
- **C賞**：スマキャラスタンド（全4種）
- **D賞**：アクリルキーホルダー（全15種）
- **E賞**：缶バッジ（全13種）

販売期間

2022年6月21日（火）12:00～7月24日（日）

スクラッチ販売ページ

https://scratch.dmm.com/kuji/ys/



Wチャンス賞

第１弾：E賞缶バッジ コンプリートセット（3名）（6/21(火)12:00～7/2(土)11:59）
第２弾：D賞アクリルカード コンプリートセット（3名）（7/2(土)12:00～7/13(水)11:59）
第３弾：アクリルアートボード（10名）（7/13(水)12:00～7/24(日)23:59）

※抽選期間中でも規定数に達し次第終了します

6月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！

ワンピース・アルティナ

サイバーなイメージが強いアルティナがワンピース姿を披露！ 《黒兎（ブラックラビット）》のコードネームながらも、ミリアムをイメージさせるホワイトの色合いは、なかなかに印象深いところだ。



THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
６月はおなじみの期間限定イベント「ナハトの奮闘記」を開催！ さらに、『閃の軌跡』のアルティナが、印象的なカラーリングの衣装姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.18 クローゼ編」実装！

書状を渡すため、リベール王国・エルベ離宮を訪れたナハト。
王太女との謁見を無事に終え、帰路に着こうとしたその時——
突如として鳴り響いた砲声に緊張が走る！
これはまさか、リベール兵による軍事クーデターなのか……!?









※イベントは終了しています。

※画像は開発中のものです。 ※ 上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

キーアの部屋のドアが、かすかな音をたてて開く。
廊下に人の姿はなく、部屋の中から出てくる人もいない。

もしも、誰かが見ていたなら風でも吹いたかと思っただろう。
ドアの隙間から、滑るように白色の仔猫が出てきた。
「にゃあ〜〜……」
シロカゲは無人の廊下を音もなく歩いていく。
たたた、と階段を降りた。
ソファーのならべられた応接スペース。そこで、青と白のマフマフしたものを見つけた。
「にゃおん?」
なんだろう? とシロカゲは好奇心を発揮して、たしっ、と爪を立てた。
「…………………」
ツァイトは朝のまどろみのなかにいた。
人ならざる鋭敏な感覚は、寝ていてさえ周囲の状況を把握する。むろん仔猫が近づいていることも察知していたが、どうせ気づいて逃げていくだろうと高をくくっていた。
しかし、どうやら身じろぎもしなかったせいで、ツァイトを置物かなにかと勘違いしたようだ。
だらんと床に伸ばしていた尻尾に、爪を立てられた。
なんの痛痒もない。

たとえ刃物や銃器であっても、己が傷つけられることなどないとツァイトは知っている。
あるいは、最強と名高い遊撃士——風の剣聖とやらであればわからないが。
たしっ、たしっ、と仔猫が尻尾を叩く。
毛の一本とて痛みはしないが、心地よい時間を邪魔されて、口の端が歪んだ。
重火器すら砕き散らす牙が、わずかに覗く。
どう自らの存在を知らせようか?
小さい存在に慈愛を示す白狼ではあるが、仔猫のおもちゃに甘んじるほど矜持を捨てているわけではない。
追い払う算段をしたとき、ふとティオの言葉が蘇った。
「小さい動物というのは、あまり恐がりすぎると体調を崩したり、死んでしまうこともあるそうです」
ティオやキーアが仔猫を大切にしているのは理解している。
ロイドは熱心に元の飼い主を探しているようだ。
エリィが常々仔猫の健康を気遣っているのも知っている。
そして、無関心を装いつつランディやセルゲイですら。

たとえば、今、ツァイトが立ち上がって――
爪を立てているのが巨大な狼の尻尾だったたと、仔猫が気づいたら？
驚いて死ぬかもしれない。
「……ッ‼」
ツァイトは呼吸さえ止めた。
誇り高き白狼としては、仔猫殺しなどという汚名をかぶるわけにはいかなかった。
さっさと飽きてくれるのを祈るが、よほど気に入ったのか、仔猫は尻尾にじゃれついてきた。
「にゃゃぁ～～～！」
さらに、爪を立てて背中へとよじ登ってくる。
「ふに！　ふに！」
好奇心と冒険心が小躍りをしているようだ。
痛くも重くもないが、むしろ転げ落ちないか心配だったし、なにより自分に気づくのではないか、と気が気ではない。
とうとう、仔猫はツァイトの三角の耳の間へと到達した。
「にゃゃぁ～～～‼」
「………………………」
ツァイトは石化でもしたかのように全身の筋肉を硬直させていた。
しかし、仔猫がうかつにも足を滑らせる。
転げ落ちてきた。
鼻先に爪を立てられる。
「～～～ッ⁉」
ツァイトは思わず鼻息を吹いてしまった。
仔猫が床に落ちる。
「ふぎゃ⁉」
ひっくり返った姿勢のまま見上げた。
目が合う。
お互いに固まった。
冷や汗が背筋をつたう。ツァイトは、かつてないほどドキドキしていた。
仔猫がガクガクと震えて――
ジョ～～～～、と絨毯のうえにアンモニア臭のするシミを広げた。
それから、おそらく仔猫にとっては全力で……ツァイトにとっては、ハラハラするほど前足と後ろ足をもつれさせながら、階段を駆け上がっていった。
「にぎゃ～～～～～‼」

「…………フゥ」
死ななくてよかった、とツァイトはため息をこぼす。
しかし、お気に入りの寝床には、すっかり仔猫の臭いをつけられてしまった。支援課の誰かが絨毯を洗うまで使い物にならないであろうことは疑いようがない。
「グルル……」
そのとき、ロイドとキーアが支援課ビルに戻ってきた。
ツァイトの横まできて、ふたりが立ち止まる。
「ん？　なんか臭うな……？」
「ほんとだね」
「これは……まさか……」
「あ～、ツァイトがおもらししてる～!!」
「なんだって!?」
「ガルゥ!?」
キーアに指さされて、ロイドよりもツァイトのほうが驚いた。
ぶんぶん、と首を左右に振る。
「ガウッ！　ガウッ！」
「ほえ？　ああ、ちがうの？」

キーアが言葉を理解できるおかげで、えん罪は晴れたが、いたく自尊心を傷つけられたツァイトだった。

仔猫が来てから一週間が経ち――
ロイドたちは会議スペースとしても使っているリビングで昼食を済ませた。
午後の支援課の活動をはじめようかと思った矢先、警察本部に出向いていたセルゲイ課長が戻ってきた。
「ロイド、ティオ、ちょっと来てくれ」
「はい」
「なんでしょうか？」
ふたりして課長室に呼ばれた。
「エプスタイン財団のロバーツ主任から、支援要請があってな。もう導力端末にも登録されていると思うが……」
「ロバーツ主任ですか？」
「なにやら、また面倒な予感がします」

ティオにとっては上司にあたる人物で、どうやら彼女のことを娘のように溺愛している様子なのだが、愛情表現が特殊すぎて、うまく伝わっていないらしい。
「どんな支援要請なんでしょうか？」
「それは依頼者から聞いてくれ。先方からお前たちを指名してきたんでな。知らぬ仲でもないし、なにか理由があるに違いない」
「わかりました」
「めんどくさいです」
「ティ、ティオ⁉」
「わかっています。ちゃんとがんばります」
いつにも増して平坦な口調のティオだった。
セルゲイ課長がタバコに火をつけ、ふぅ～と紫煙をくゆらせる。
「エプスタイン財団には、なにかと世話になってるんでな。できるだけの協力はしてやれ」
「ええ、確かに、導力ネットワークのおかげで、捜査も効率的にやれていますからね」
「ま、そういうことだ」
「ティオを支援課に出向させてくれたことにも、感謝しているし」
「あ…………」
彼女の頬に微かに朱が差した。

くるり、とティオが背を向ける。
「……ロイドさん、早く行きましょう。他の支援要請もありますし、効率的に終わらせるべきかと」
「ああ……いや、ちょっと待っててくれ」
「どうかしましたか？」
「出かけることを伝えておいたほうがいいだろうし、仔猫(シロカゲ)のことを頼んでくるよ」
三階にある部屋を訪ねる。
ドアを開けたエリィが表情をほころばせた。
「あら、ロイド、どうかしたの？」
「支援要請があって、今から出かけるんだ」
「そうなの？　じゃあ、すぐに準備するわね」
「あ、いや……ロバーツ主任からの指名で、俺とティオだけで行くことになった」
「えっ、そうなの……」
エリィの表情が、すこし沈んだ。
それだけ積極的に支援課の活動に取り組んでいるのだろうとロイドは解釈する。
「すまない……そのうえ、こんなことを頼むのは気が引けるんだけど、でも頼れるのはエリィしかいなくて」

「えっ？　あの、なんでも言って、ロイド」
「ありがとう。じゃあ、シロカゲのことを頼む。キーアも今日は他の子どもたちと出かけてるんだ」
「あ……仔猫？」
「俺もティオもキーアも留守にするし、ランディや課長に頼むわけにもいかないからな。間違って外に出てしまったり、またツァイトのところへ行ってしまわないよう見てて欲しいんだ」
ふぅ、とエリィがうつむく。
「そうね……必要なことだと思うわ」
「頼めるかな？」
「ええ、もちろんよ。心配しないでロバーツ主任のところへ行ってきて」
「ありがとう、エリィ」
笑顔で見送ってくれた。

エリィは読みかけの本を持ってキーアの部屋を訪ねた。

ベッドで寝ていた仔猫が、「にゃお？」と鳴く。
「ん……シロカゲちゃん、いっしょにお留守番よ……」
「にゃおーん」
エリィは椅子に腰掛け、本に目を落とした。
こんなにゆっくりした時間を過ごすのはひさしぶりで、ずっと読むのを楽しみにしていた本なのだけれども——目が文字のうえを滑ってしまう。
「ふぅ……」
「にゃーご？」
気がつくとシロカゲがベッドから降りて、エリィの足下に来ていた。
首筋を脚にすり寄せてくる。
「もしかして、慰めてくれてるのかしら？」
「にゃおーん」
「……あの人は、どうして気づかないのかしらね？」
ロイドの顔を思い浮かべると、エリィの気持ちは揺れてしまう。
今までは、ひとりを寂しいなんて感じなかったのに。
支援課に来て、ほとんどの時間を四人で過ごしたせいかもしれない。
「最近、いっしょにいることが減ったわよね。

それは、細かい支援要請が増えて、全員で行かなくなったせいもあるし……
ひとりひとりのできることが増えたせいもあるし……
仕方のないことだとわかっているけれど」
「にゃぁおお～ん」
仔猫を相手に人生相談なんて意味のないことだと思うけれど、だからこそ言えることもあった。
「もうすこし、いっしょにいてくれても……
最近はティオちゃんやキーアちゃんとばかりで。
あ、もちろん、私と彼はお付き合いしているとか、そういうのではないのよ⁉
だから、私といっしょにいる必要とかは、ぜんぜんないけれども！」
エリィは仔猫を相手に慌ててフォローする。その無意味さは承知しているが。
「……彼が、そういうことに関心がないのはわかってるの。
この街を守りたい……その正義感に一途な人だって、ちゃんとわかってる。
そこが、彼の魅力というか……
いいところっていうか……」
赤面してしまう。
仲のいい友だちにも、こんなことは言えないに違いない。

すっかり頬が熱くなっていた。
汗まで出てきた。
部屋の窓を開けて、外の空気を入れる。
ほてった首筋に心地よかった。
「ふぅ～……」
「にゃ～～ご」
「ん……平気よ。言ってるほど思い詰めてないわ。
今も同僚としては普通に接してくれてると思うし……
たぶん、頼りにされてると思うし……
それだけでも幸せなことだわ。
でも、たまにはプライベートで誘ってくれても……」
そうしないと、不安になるでしょ――という言葉は飲みこんだ。
「にゃぁおお～ん」
ふたたび、シロカゲが脚に首筋を寄せる。
胸に溜めこんでいたものを言葉にしただけで、ずいぶんと気持ちが軽くなった気がする。
興が乗ったエリィは「ロイドってば、あのときは、こんなこと言ったのに」だとか「ここまで言ったのに気づかないなんて」だとか。

要するに〝ロイドが朴念仁で寂しい〟というようなことを延々とシロカゲに語って聞かせた。

陽が傾き――

そろそろ夕飯の支度をしようかと立ち上がる。

「ふふ……すっかり聞いてもらっちゃったわね。もっとも、猫を相手に話したところで、誰かに言われることなんて……な……い……」

さんざん洗いざらいしゃべってしまってから、エリィは、今さらになって思い出した。

ティオもキーアも動物の言葉がわかる。

「きゃあああぁぁぁ～～～～!?」

ビクッ、とシロカゲが驚いて飛び退いた。

エリィは顔を青ざめさせる。

「な、なし！　今までの、なしね!?　お願いだから、聞かなかったことにして！」

「にゃ……にゃお……？」

「ああ、私には動物の言葉なんてわからないし……」

そもそも、どこまで理解されているのか。

忘れて欲しいと頼んだところで伝わるのか。

いつものエリィならば、仲間のスキルを把握して最善手を打つのだが、すっかり油断していたと言う他はない。

泣きそうだった。

そのとき、階下からキーアの甲高い声が聞こえてくる。

「ただいまー!!」

「キーア、帰ったら手を洗わないと」

「風邪の予防は大切かと」

「はーい！」

ロイドとティオも帰ってきたようだ。

どうしたらいいか、まったく考えがまとまらない。焦っているせいだとは思うが、落ち着かなければと思えば思うほど、思考が空回りしてしまう。

「あ……うぁ……」

階段を上ってくる足音がする。

「うーん、すっかり遅くなっちゃったな」

「これほど時間がかかるとは、予想外でした」

「シロッカゲ～♪　シロッカゲ～♪」

よりによって、動物と会話ができるふたりと、ロイドがやってくるなんて。
「にゃゃゃあ〜〜〜‼」
妙に興奮した鳴き声に、振り返る。
シロカゲが窓から身を乗り出していた。外を舞うチョウチョに前足を伸ばして。
「にゃっ！」
その身が、窓の外へと転げた。
――落ちる⁉
「だめぇぇぇ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜‼」
エリィは弾かれたように駆け寄ると、思い切り手を伸ばした。
シロカゲの体をつかむ。
しっかりと。
「ふにゃっ⁉」
「ほっ……」
安堵したのもつかの間、エリィ自身の体も、窓から大きく出てしまっていた。
石畳の地面が見える。
遠い。
部屋は三階だ。

この高さで、もしも頭から落ちたなら――
「い、いや……」
まだなにもできていない。
まだやりたいことがいっぱいある。
仔猫だって無事では済まない。
「た、たすけ……ロイド〜〜〜〜〜〜〜〜〜‼」
「エリィーーーッ‼」
叫び声がして、ドアが砕けんばかりに開かれた。
直後、外へと落ちかけていたエリィの脚が、がっしりとつかまれる。
止まった。

「あ……」
「大丈夫か、エリィ⁉」
「ロ、ロイド……？」
「ご無事ですか、エリィさん！」
「エリィ、だいじょーぶ⁉」
ティオとキーアも声をかけてくる。
安堵したとたん、すこし涙がこぼれてきた。

「くぅ……だいじょうぶ……あげてくれるかしら？」
「あ、ああ……」
エリィは胸にシロカゲをしっかりと抱きしめて、部屋に引き戻してもらった。

* * *

安堵のあまり、エリィは床にへたりこんでしまう。
「はぁ……ありがとう、ロイド……もうダメかと思ったわ」
「ふ〜、よかった」
彼のほうも、床に膝をついた。
あやういところで助けられたシロカゲをキーアが抱きしめる。
「よかったね、シロカゲ！」
「ほんとうです。エリィさんもシロカゲも無事でなによりでした」
ティオも胸をなでおろした。
申し訳なくて、エリィはうつむいてしまう。
「ごめんなさい……私が窓を開けておいて、シロカゲちゃんから目を離したばかりに……」
「いや、俺も窓を開けてたことはあるし、たまたまだと思う。それより、エリィが飛び出

さなかったら助けられなかった」
「でも……」
「エリィ、シロカゲを助けてくれて、ありがとう」
「え、そんな……ロイドがいなかったら、私だって……」
「ありがとー、エリィ！」
「助けたのは事実なのですから、誇っていいのでは？」
「そう……かしら？」
「にゃーお、にゃっ、にゃっ……」
キーアの腕のなかで、シロカゲが鳴き声をあげた。
ティオとキーアが耳を傾ける。
「どうしましたか？」
「ふんふん……？」
「あ……!?」
すっかり忘れていた。
エリィはシロカゲに秘めた想いをあらんかぎり、それこそ日が暮れるまで打ち明けてしまったのだ。
青ざめた顔に気づいて、ロイドが心配そうに声をかけてくる。

「大丈夫か、エリィ、どこか痛めたのか？」
「う、ううん……違うの……」
「でも……」
「私なら、平気よ」
ティオとキーアが、シロカゲから話を聞いている。
知られるのは、すごく恥ずかしい。
けれども、こんな形ではあっても想いが伝わるのなら、それでも――
「ううぅ……でも、やっぱり……」
「やっぱり、どこか痛いのか、エリィ？」
目を伏せるエリィに、ロイドがそわそわと落ち着かない。
話を聞き終えたティオがうなずいた。
「わかりました……そう、伝えればいいのですね？」
「くっ……」
エリィは覚悟を決めた。
わたわたと《ティアラルの薬》やら《キュリアの薬》やらを取り出しているロイドを見つめる。
「ねぇロイド、ちゃんと聞いて」

「え？」
「ちゃんと……ロイドに聞いて欲しいの」
「あ、ああ？」
覚悟を決めた。
ティオが、いつも通りの平坦な口調で――
「ええと……
〝命の恩人の秘密を漏らすほど、あっしは野暮じゃありませんや。お嬢さん、安心してくんなせえ〟
……だそうです。どういう意味でしょうか？」
「あはは、シロカゲは、ときどきわかんないこと言うよね！」
エリィは固まっていた。
――そういう性格だったの!?　と衝撃を受けていた。
ロイドが首を傾げる。
「よくわからないけど……シロカゲは意外としっかり者みたいだな」
「あ、あはは……あははは………」
エリィは脱力のあまり、自分でもよくわからない笑い声をもらしていた。
つられるようにキーアも笑う。

ロイドとティオは、不思議そうに眺めていた。
そこに、ランディが入ってきた。
「よお、楽しそうにしてるとこ悪いけど……お客さんだぜ」
「え？　ああ、誰だろう」
「その仔猫も連れて行ったほうがいいぞ」
「ほえ？」
ランディにうながされて、キーアはシロカゲを抱いたまま一階に降りていく。
みんなが出てから、エリィは乱れていた衣服を整えて、後に続くのだった。

ロイドたちは玄関へと降りた。
来客というのは、遊撃士のリンとエオリアだった。
「おや、そいつが迷子の仔猫だね？」
「ああ！　ティオちゃん、いつ見てもかわいい！　お姉さんになでなでさせて～♥」
男勝りなのがリンで、ティオににじり寄っているのがエオリアだ。



「えっと……今日はどういった用件で？」
「この写真の猫を探してくれって、遊撃士協会（ギルド）に依頼があったんだよ」
　リンが写真を取り出す。
　見てみると、キーアの抱いているシロカゲそっくりの猫だった。
「元の飼い主からの依頼があったのか」
「ああ、ランディが〝支援課にいる〟って教えてくれたのさ」
　リンに水を向けられると、赤毛の青年がぽりぽりと頬をかく。
「まぁ、飼い主が探してるなら遊撃士協会のほうに話が行ってるんじゃないかと思ってよ」
「ランディ、飼い主を調べてくれてたんだな」
「別にたいしたことじゃねえっての。買い物のついでに寄っただけだ」
　ティオが眉をひそめて。
「それで……迷子の仔猫を探していたことと、わたしがなでられていることに関係はあるのでしょうか？」
「ん～？　ないわよ？」
　ぐいぐい、とティオがエオリアを押しのける。
　リンが肩をすくめた。
「いいかげんにしとかないと、嫌われるよ」

「ああん！　それはダメ！　お姉さん、泣いちゃう！」
　あちらのことは置いておいて――
　ロイドはキーアの傍らに膝をついた。
「キーア、シロカゲを……」
「うぅ～……」
　元の飼い主が見つかったといっても、キーアは別れを惜しんでいるようだ。
　こうなることは予想できたのに、自分のミスだ、とロイドは自責の念にかられる。
　そこへ、エリィが降りてきた。
「ロイド……まかせてもらっていい？」
「え？　ああ、頼む」
　エリィがキーアの前にしゃがみこむ。ゆっくりと諭すように話しはじめた。
「キーアちゃん……シロカゲちゃんの家族が見つかったのよ？　それは、うれしいことで

キーアがシロカゲに視線を落とした。
「うれしいね！　家族が見つかったよ、シロカゲ！」
「にゃゃゃあ～」
「えへへ！　シロカゲもうれしいって！」
リンがうなずき、エオリアがシロカゲを受け取った。
「ばっちり、元の飼い主に届けるよ」
「またね、キーアちゃん。それと、ティオちゃんも」
リンとエオリアが支援課ビルの玄関を出る。
ランディは軽く片手をあげ、ツァイトは階段の陰から見送っていた。
最後に、仔猫の鳴き声がした。
扉が閉まる。
「ふふ……〝ありがとう〟……だそうです」
ティオがつぶやく。
笑顔で見送っていたキーアが、ぼろぼろと涙をこぼしはじめた。
ぐっ、とエリィが抱きしめてあげる。
「えらいわよ、キーアちゃん」
「うえええええ～～～‼」

ロイドはそんな仲間たちを温かく見守っていた。

第3話

『ノエルの休日』

雲ひとつない快晴だった。
東通りには風車や果物屋が商品を並べている。
ロイドは特務支援課の仲間たちと手分けして聞きこみをしていた。
もう昼過ぎだ。ひととおり情報を集めたし、そろそろ約束した合流場所へ向かおうか、と思ったとき――
「ん？　あれは……」
白いニット帽とノースリーブセーターに短パンという愛嬌がありながらも快活な格好の少女に目をとめた。
手すりにもたれて、ぼんやりと陸橋の下を走る導力列車を眺めている。
「やあ、ノエル曹長じゃないか」
「わわっ……ロイドさん!?　お疲れ様です！」
私服だってのに彼女は、お手本として警備隊の教本に載りそうなほど寸分の隙もない敬礼をした。
「はは……相変わらずだな。その服からすると今は休暇じゃないのか？」
「あ、そうでした。あわてると、つい出ちゃうんですよね」
「別にいいんじゃないかな」
「え？」

「それだけ、ノエル曹長が警備隊の仕事に真剣だってことだから」
「あ…………」
少女の頬が、わずかに赤くなった。
ノエル・シーカーが所属しているのは、この街（クロスベル）の警備隊だ。
警備隊は外敵から自治州を守るための組織であり、軍隊のようなものだが――政治的にも地理的にもエレボニア帝国とカルバード共和国に挟まれた特殊性ゆえ、様々な制約を課せられている。
名称や装備だけでなく、訓練の内容にまで。
「警察官の俺が知ってる事情なんて、ごく一部だろうけど、予算も装備も限られたなかで他国の軍隊と同じ重責を担ってるんだ。警備隊は本当にすごいよ」
「うーん、そうなんですかね。目の前のことで精一杯やってるだけですけど……いまいち実感ないです」
「……なにかあったのか？」
「え？」
「いつもより元気がないみたいだ。それに、たいてい休暇はフランと一緒なのに、今はひとりみたいだし」
ノエルとフランは姉妹で、とても仲がいい。ノエルは警備隊員でフランは警察官だが、



休日を合わせて出かけるほどで、とくに妹のフランが〝お姉ちゃん大好きっ子〟なのは警察内でも有名だ。

「ふふ……ロイドさんにはかなわないなあ……さすがは捜査官ですね」

「俺が聞いていいことなのかは、わからないけど……」

「いえ、せっかくだから聞いてください。といっても、情けない話になっちゃいますけど」

二日前——

ノエルは巡回の途中、古戦場の前でクルマを停めた。

助手席のバレル隊員が身を乗り出す。

「なんだこれは!?」

「酷いですね」

古戦場は見通しが利かない地形のうえ、街道に比べて強い魔物が棲んでいるのでゲートで封鎖してあったのだが、それが何者かに押し破られていた。

ノエルとバレルは軽装甲車から降り、ゲートを調べる。

「魔法（アーツ）とか火薬ではなく、強い力で押し開けたみたいですね。ゲートが曲がっちゃってます」

「つ、強い力だって……？　まさか、大型の魔獣が……あわわ」
「いえ、これは……おそらく、導力車で押し通ったんだと思います」
「なんだって⁉」
「ほら、ゲートに黒色の塗料がついてます。タイヤの跡もありますし」
「なんだ、導力車の仕業か。ほっとしたよ……月の僧院のことを思い出しちゃったじゃないか」
「あのときは大変でしたね」
　ノエルは肩をすくめる。
　以前、月の僧院に出現した奇怪な魔獣を発見したとき、バレルが驚きのあまり寝込んでしまったのだ。
「ふふん、人間がやったとわかれば怖いことはないぞ。どこの誰だかしらないけど、きっちり捕まえてゲートを弁償させてやらないとな！」
「はい！」
「でも、ふたりだけで古戦場に入るのは危なそうだから、応援を呼ぼうぜ！」
「あ、そうですね」
　ノエルはエニグマ——通信機にもなる第5世代戦術オーブメントを取り出し、連絡を取る。

『はい、こちらタングラム門警備隊であります！』
「巡回警備中のノエル曹長です」
『お疲れ様です！』
「ソーニャ副司令に繋いでもらえますか？」
『すみません。副司令は、急に本部から呼び出されてご不在であります』
「また？　最近、多いですね……」
『なにかありましたか？』
「ええ、今、古戦場のゲートにいるんですが——」
　ノエルは状況を説明し、応援を要請した。
　ここまでは問題なかった。警備隊のマニュアル通りの手順だ。
　ところが、古戦場の奥から発砲音が聞こえてきた。
　ノエルとバレルは顔を見合わせる。
「ゲートを押し通った人が、戦ってるんでしょうか？」
「今のは、機関銃の音じゃなかったか？　ただの民間人じゃなさそうだぞ？」
「だとしても、誰かが魔獣と戦っているのは間違いありませんね……」
「なあ、ノエル曹長、妙なことは考えるなよ？　ゲートを壊して機関銃を持ってるようなヤツだぞ。応援を待って慎重に行動したほうがいい」

「たしかに、危険はあるかもしれません……でも、誰であろうと民間人を守るのは警備隊の重要な役目です。応援を待っていたら手遅れになるかもしれないんです！」
「う、うーん……ああ、もう……本当に月の僧院のときを思い出しちゃうよ。よし行こう、ノエル曹長！」
「はい！」

　古戦場――

　わずかなタイヤ跡を追って奥に進んだノエルたちは、ちょうど魔獣に囲まれているトラックを見つけた。
「黒色のトラック……‼」
「ノエル曹長の言ってたとおりだね。前のほうに傷がついてる」
　箱形トラック（バンボディ）の周りには、黒ずくめの機関銃を持った男たちが、全部で四名ほど。
　巨大な牙を持つトカゲのような魔獣――ブレードファングと戦っていた。
「くそっ！　ぞろぞろ寄ってきやがって！」
「おい！　もう充分だ、引き上げるぞ！」
「待て、導力車を攻撃されたらまずい……ん？」
「け、警備隊か⁉」

　こちらに気づいたらしい。
　ゲート破りの犯人と、魔獣――どちらも放ってはおけない。
　ノエルは迷ったが。
「警備隊です！　魔獣はあたしたちに任せてください！　貴方たちには事情を聞かせてもらいます。そこで動かないでください！」
　犯人たちの前に飛び出し、魔獣に電磁ネットを浴びせた。
　バレルがアサルトライフルで支援する。
「命令、聞くかな？」
　その懸念はノエルにもあったが、まさか魔獣と一緒になって犯人たちを攻撃するわけにもいかない。
　黒ずくめたちが、ニヤリと笑った。
「助かったぜ、警備隊さんよ」
「くくく……まったくだな」
「よし、行くぞ！」
「急げ！」
　連中はトラックに乗りこむと、ノエルの言葉など無視して逃げ出してしまった。
「なっ⁉」

「は～、やっぱりこうなったか……応援の連中が間に合ってればいいけど……」
「くっ……」
ノエルたちは急いで魔獣を倒し、ゲートまで戻ったが、すでに犯人の姿はなかった。

その日の夕方。
本部から帰ってきたソーニャ副司令に、ノエルは古戦場での顛末を報告した。
「すみません……犯人を逃がしてしまって……」
「ノエル曹長の判断は正しいわ」
「しかし……」
ソーニャ副司令は、ふたりだけで突入した危険性や、犯人を逃がしてしまった過失を「仕方がない状況」と言ってくれた。
しかし、ノエルには自分が失敗したという思いが強かった。
副司令が眉をしかめる。
「最近、珍しい魔獣を自治州外のコレクターに売るブローカーがいるらしいわ」
「魔獣をコレクション……ですか⁉」
「ええ、危険だと思うけれど、魔獣を保護する法律なんてないものね」
「古戦場には街道では普段見ることができないような珍しい魔獣がいます……つまり、今日の犯人は……」
「そうと決まったわけではないけれど」
「やっぱり、あたしが捕まえてれば！」
「ふぅ……仕方がないわね。ノエル曹長……」
「はい！　全力で捜索します！」
「そうね。ただし、三日ほど休みを取りなさい」
「ええっ⁉」
「これは命令よ。復唱」
「……あ、はい（イエス・マム）……ノエル・シーカー曹長……三日間の休暇を頂きます」
「ゆっくり街を見てくるといいわ」



「――というわけなんですよ」
ノエルはうつむいて、肩を落とした。
ずっと黙って聞いていてくれていたロイドが、ゆっくりとうなずく。
「なるほど。それで、休暇だっていうのに落ちこんでたのか」

「自分が情けなくて……ハァ……」
「うーん……でも、ソーニャ副司令は正しい判断だって言ってたんだろ？　俺も同感だな」
「でも、結局、犯人を逃がしてしまったから……」
「それは仕方ないんじゃないか？」
「警備隊は忙しいのに、こうして休暇を与えられてるのは、やっぱり反省しろってことだと思うんです。私は副司令のお役に立ててないのかも……」
「いや、ノエル曹長……君に限ってそんなことは——」
　そのとき、ロイドのエニグマに着信があった。「すまない」と断ってから彼は懐から取り出し、ボタンを押す。
「はい」
　スピーカーから少女の澄んだ声が漏れ聞こえてくる。どうやら、相手は特務支援課の仲間——エリィだった。
『ロイド、集合時間を過ぎてるけど……なにかあったの？』
「あぁ、ごめん。ちょっと話しこんでたんだ」
『まだ東通り？　もうみんな集まってるし、そちらに行きましょうか？』
「いや、大丈夫だ。予定通り中央広場で落ち合おう」
『わかったわ、待ってるわね』

　ロイドが通信を終えた。
　ノエルは申し訳なくて頭を下げる。
「すみません……お忙しいところ、長話してしまって」
「いや、俺のほうこそ途中になってしまって、すまない」
「あたしは大丈夫ですから、早くみなさんのところへ行ってあげてください」
「……わかった、また会おう。俺も、ノエル曹長にはゆっくり街を見てほしいな」
「え？」
「それじゃ」
　ソーニャ副司令と同じ言葉を残して、ロイドは足早に中央広場へと向かった。
　彼の姿を見送ってから、ノエルはため息をつく。
「ゆっくり街を見る……か。そんな気分でもないけど、線路ばかり眺めてるのも時間がもったいないかな」
　ノエルは龍老飯店（りゅうろうはんてん）で遅めの昼食を取ることにした。

　龍老飯店の名物——天下一炒飯は、ぱらぱらの米粒にもかかわらず噛むとふっくらで、

口のなかで味と香りが広がる。
　醤油と胡椒に、エビやカニなど海鮮の風味が添えられ、どれだけ食べても飽きがこない。スープや餃子との相性も最高だった。
「ふぅ～、堪能したな～」
　タングラム門の食堂にいるティマスの料理も美味しいが、この味はこの店でないと味わえない。
　看板娘のサンサンが話しかけてきた。東方風のドレスがよく似合っている。腰まわりの細さなんて同性でも見とれてしまうほどだ。
「お客さん、いい食べっぷりね」
「え？　あはは……そ、そうですか？」
「おかわりはどうする？」
「ふふ、おなかいっぱいです。ごちそうさまでした」
「ありがとうね！」
　ノエルは支払いを済ませると龍老飯店を後にした。

　ぐっと伸びをする。
「う～ん、いっぱい食べたら、ちょっと元気が出たかな」

　我ながら単純だなあ、と思う。
　さて、次はどこへ行こう？
　いつもならフランが新しい店とか、特売セールとか、イベントとか、あれこれ下調べしてくれるのだが、今回は急だったため、彼女のほうは休みを取れなかった。
　フランのがっかりした声を思い出す。
「……なにか買っていってあげようかな」
　東通りの屋台を眺めてみる。クマのヌイグルミも売っていた。
　あのクマ、うちの子に似てるかな？　でもうちの子のほうがかわいいよね——なんて思ったり。
　ふらふらと見てまわっていたら、ドンと肩が当たってしまった。
「あっ、すみません」
「へへ……いや、こちらこそ。よそ見してたもんでさ」
　相手はノエルより少し年上くらいだろうか。背は高いが痩せており、ひょろっとした印象がある。
　髪は長くて鎖のネックレスをぶらさげ、金の指輪をつけていた。物腰はやわらかいが、ちょっと威圧感がある。
「君さ、このへんじゃ見かけない顔だけど、旅行者かい？」

「え？　いえ……」
　最近は休暇を取れてなかったし、フランと一緒だと東通りに来ることは少ない。
「ふーん、じゃあ、地元（クロスベル）の人？」
「そうですね」
「そうか……今、ひとり？」
「ええ」
「へへ……とっておきのお買い得品があるんだ。よかったら、特別にわけてあげるよ」
　愛想のいい笑顔を向けてくるが、どうやら物売りのようだ。
「いえ、そういうのは……」
「そう言わないでさ。な？　こっちに来てくれよ。人前じゃ見せられないんだよね」
「……」
　ただの物売りというには、すこし胡散臭い。
　警察の真似事をする気はないが、詳しい話を聞いてみることにした。
　東クロスベル街道へと伸びる通り道へと連れてこられる。
　この時間に街を出入りする人は少ないらしく、周りは閑散としていた。
「そのお買い得品って？」

「へへ……幸運を呼びこむ魔法のアイテムさ」
「まさか……!?」
　しばらく前に起きた事件を連想し、ノエルは警戒心を強める。
　だが、彼が懐から出したのは、ぜんぜん関係のなさそうな品物だった。
「……メダル？」
「こいつは、幸運を呼びこむメダルさ。今なら半額にしてあげるよ。お買い得だろ？」
　どこかの国の硬貨だろうか。初めて見るデザインだが、それほど特別な物ではなさそうだ。金や銀というわけでもないみたいだし。
「はぁ……たんなる縁起物か」
「本来は２００００ミラするが、１００００ミラでいいぜ」
「えっ!?」
　法外な要求に絶句した。
「なんなら、持ってるミラ、全部でもいいけどな」
「あなたは……!!」
　長髪の男から愛想笑いが消えていた。恫喝するような鋭い血走った目つきで睨んでくる。
　気がつくと、ノエルの背後に似たような風体の男がふたりほど近づいていた。
　仲間がいたらしい。

囲まれてしまう。
「へへへ……」
「お嬢ちゃん、さっさと買ったほうがいいぜ？」
「そうそう、幸運のメダルがあれば、ケガをしなくて済む。ありがたいだろ？」
「くっ……‼」
こんな連中でも市民は市民、警備隊員である自分がケガをさせるわけには。
しかし、これは犯罪だ。放っておくこともできない。
なんとかケガをさせずに捕まえて、警察に知らせないと、とノエルは、あれこれ考える。
男が怒声をあげた。
「さっさと出すもん出しな！　俺たちはこの街を牛耳っているテスタメンツなんだぜ⁉
地元のやつなら、当然、知ってるはずだよな⁉」
「なんですって⁉」
テスタメンツは旧市街を根城にする不良グループだ。
しかし、そのリーダーは、一般市民への押し売りなどという卑劣な犯罪をさせる人物とは思えなかった。
さほど面識があるわけではないが……
あのロイドが気を許すくらいには、筋の通った人物だったはず。

そのとき――
彼らの背後に、すっとひとりの青年が立った。
中性的な美貌の持ち主だった。皮肉めいた笑みを唇の端に乗せる。
「やれやれ、テスタメンツに君たちみたいな恥知らずがいたなんて、知らなかったな」
男たちが慌てて振り返った。
「なっ⁉」
「なんだ、てめえ⁉」
「ッ⁉　待て……こいつは……‼」
長髪の男の制止も聞かず、ふたりが殴りかかる。
「すっこんでろ！」
「くらえ！」
「シッ」
短い呼気と同時に、青年が左手の拳を放った。
男たちには見えなかっただろう。
常日頃から警備隊で戦闘訓練を受けているノエルだからこそ、かろうじて動きを追うことができた。
それほど、速い。

「ガッ……!?」
「グゥ!?」
うめき声をもらして、殴りかかった男たちふたりが膝をつく。
最初にノエルに声をかけてきた長髪だけは、青年を知っていたらしい。
「……ワ、ワジ」
「ああ、ワジ・ヘミスフィアさ。一応、テスタメンツのヘッドをやらせてもらってる。君のことは見たことないけどね」
「う、ううぅ……行くぞ、おまえら!!」
「ぐうぅぅ……」
「おぼえてやがれ……!!」
男たちが逃げていく。
ぽかん、と見ていることしかできなかったノエルだが、あわてて追いかけようとする。
「ちょ……あなたたち！　警察に……!!」
「いいから」
ワジに止められた。
その表情は氷のよう――今の男たちを寛大に許したという雰囲気ではない。
「なにか、あるの？」

「どういう意味だい、僕はべつになにも……おや、お姉さんは……」
「あたしは警備隊のノエル・シーカー曹長です」
「ああ、ロイドと一緒にトリニティに来たことがあったよね。軍服も似合ってたけど、今日の格好も、なかなかいいじゃない」
「そ、そんなことより……なぜ、あの人たちを逃がしたの？」
「あんなの小物だろ？」
「君は気にしないかもしれないけど……ああいうのを放っておいたら、この街が、どんどん市民にとって危険な場所になっちゃうんだよ!?」
「やれやれ、またお説教かい？」
「必要なら何度だってします」
「……ただ逃がしたわけじゃないさ。あれは僕のほうで始末をつける」
「やっぱり、なにか理由があるのね」
「お姉さんは警備隊の人だろ。市内の治安なんて管轄外じゃない？」
「見なかったことにしろって言うの？　そんなことできないよ。管轄なんて関係ない」
「ふむ……困ったな」
「ちゃんと話して」
じっ、とワジを見つめる。

彼は視線を逸らしていたが、ノエルの真剣さは感じているはずだった。
「……人が見てるよ？　笑われてる」
「ごまかしたって無駄です！」
「やれやれ……仕方ない、ついてきなよ」



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.137

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/